Journal of The Human Development Research, Minamikyushu University 2015 ,Vol.5,77-85

論文

学校体育におけるドッジボールの教材価値に関する一考察

― ボールを捕ることが苦手な子どもの学びの視点から

宮　内　　孝

A Study on the Value of Dodgeball as Teaching Material in Physical Education
：From Learning Perspective of the Children with Difficulties of Catching a Ball
MIYAUCHI Takashi

キーワード：ドッジボール　教材　捕球

概要：ドッジボールは、小学校において体育の授業ばかりではなく、休み時間や特別活動の時間にも楽しまれている。しかしながら、ボールが捕れない子どもにとっては、ドッジボールへの実質的な参加は難しく、ドッジボールへの否定的な感情をもちかねない課題がある。

しかも、ドッジボールは、ボールゲームの入門期ともいえる小学校低学年の子どもを対象として学習される。この時期に、ドッジボールへの否定的な感情をもたせると、その後に学習するボールゲームへの苦手意識にもつながる。ひいては、体育学習自体が嫌いという感情をもつことになりかねないことからも、この課題を解決することは極めて重要である。

そこで、本稿ではドッジボールの教材価値について、ボール操作のなかでもボールを捕ることが苦手な子どもの学びの視点からとらえ直した。そして、そこから浮かび上がった課題解決を意図した教材配列を提示することで、今後のドッジボールの教材づくりの基礎資料を提供するものである。

1．はじめに

ドッジボールは、小学校において体育の授業ばかりではなく、休み時間や特別活動の時間にも楽しまれている。また、日本ドッジボール協会主催の全国大会が開催されるなど、子どもたちに人気のボールゲームの一つである。

しかしながら学校体育において、高橋が「男子中心、技能のすぐれた者中心になりがちなドッジボールを克服するためのルールのあり方、技術練習のあり方、チームの人間関係のあり方を問い直していく必要がある」(14－107頁) というように、投捕の技能が劣る子どもの実質的なゲーム参加が難しい。さらに、内村らが「ドッジボールで『ボールを投げられるのが怖い』といってゲームに参加しない児童が少なくない」(16－79頁) と指摘するように、ボールが捕れないことは、ドッジボールへの否定的な感情につながる。

それにもかかわらず、伊藤も述べるように、ドッジボールはボールとコートがあれば、容易に活動が成立し、あたかも子どもは楽しんでいるように見えるが、投げる動作や捕る動作が身につかないことも多い (6－20頁)。また、歌川が「体育の時間になれば、容易に『ドッジボール』というようなことが繰り返され、『ドッジボール』がクリアしなければならない問題点がなおざりにされ、ただたんに『ドッジボールをさせておけば…』というような風潮が多少なりともあったのではないか」(15－52頁) と指摘するように、教師は、既存のドッジボールのゲームを子どもに与えるだけで、後は子どものプレイを見守るような授業は少なくない。

さて、岩田は「『素材』としてのスポーツ種目や技を、教え学ばれるべき『学習内容』を見通しながら、学習者が取り組み、チャレンジしていく直接的な課題に再構成（加工・修正）としていくプロセス」(7－20頁) によってつくられたものが教材であるという。

この岩田の論に依拠すると、先に述べた「既存

のドッジボールのゲームを子どもに与えるだけで、後は子どものプレイを見守る」ような授業には、この教材づくりの視点が希薄であるといわざるをえない。すなわち、特に、ボールを投げる、捕ることが苦手といったボール操作の技能が劣る子どもの実質的なゲーム参加を保障する教材づくりが欠落しているのである。

しかも、ドッジボールは、ボールゲームの入門期ともいえる小学校低学年の子どもを対象として学習される。この時期に、ドッジボールへの否定的な感情をもたせると、その後に学習するボールゲームへの苦手意識にもつながる。ひいては、体育学習自体が嫌いという感情をもつことになりかねないことからも、この課題を解決することは極めて重要である。

そこで、本稿ではボール操作のなかでも、ボールを捕ることが苦手な子どもの学びの視点からドッジボールをとらえ直し、その教材づくりに関する基礎資料の提供を目的とする。

2. 教材としてのドッジボールの価値

(1) ドッジボールの学校体育への位置づけ

日本ドッジボール協会によると、明治時代には円形コートの「デッドボール」として、ドッジボールは行われていたという。攻撃の者はボールを防御の者に当てて、これを「デッド」とした。この際、防御側には捕球は認められておらず、飛んでくるボールから身をかわすだけだったという。それから、「ドッジボール」(ドッジ＝DODGEとは身をかわすという意味)と改名され、内野に捕球が認められるようになった[(11)]。

このようなドッジボールが、学校教育に初めて取り入れられたのは、小久保らによれば、1913(大正2年)年に発布された「学校体操教授要目」においてであるという[(10－48頁)]。この要目において、「デッドボール」の名称で小学校の遊戯教材の一つとして位置づけられた。

その後も、継続的に学校体育に位置づけられ、1947(昭和22年)年に発布された「学校体育指導要綱」では、3年生向けのボールゲームとして採用されている。さらには、1949(昭和24年)年に発布された「学習指導要領小学校体育編」には、高学年「ドッジボール」、中学年「方形ドッジボール」、低学年「自由ドッジボール」「ころがしドッジボール」が採用されている。それからの学習指導要領の改訂においても、継続的にドッジボールは位置づけられ、現在に至っている。

このように、ドッジボールは、明治時代から現在に至るまでの長い歴史を経て、現在でも学校体育において子どもたちに親しまれている。

(2) 教材としてのドッジボール

先に述べたドッジボールの変遷からも、ドッジボールには2つの競争目的があることがわかる。一つは、相手の身体をねらってボールを当てるという攻撃時の目的である。もう一つは、ボールに当たらないように避けたり、捕球したりする守備時の目的である。この目的について、戦術学習の視点から廣瀬らは、「防御面の突破(ボールを通過させることを目指して、相手にボールをぶつけること)」を攻撃の課題とし、「防御面の構築(相手が投じるボールを通過させないことを目指して、ボールを保持すること)」が防御の課題であると指摘する[(4－84頁)]。

さらに、鈴木は、ドッジボールの攻守の動きとバレーボールの動きとには、類縁性があると指摘する[(2－72頁)]。ドッジボールにおいて、ボールをもった攻撃側(内野)は、自コートと相手コートを区分する境界線まで詰め寄って、相手チームの内野をねらってボールを投げつける。この時、防御側の内野はコート後方まで退却し、ボールを捕ったり避けたりする。そして、捕球すると、直ちにそのボールを持って前線まで攻め上がり、相手チームを攻撃する。

一方バレーボールは、レシーブ→セットアップ→アタックの一連の動きで攻撃を組み立てる。すなわち、後方で守り、自コートに飛んできたボールをはじいて前線に運んで、相手コートをめがけて反撃する動きとなり、この動きが前述したドッジボールの内野の動きと同型といえるのである。すなわち、ドッジボールで学習したことが、中・高学年で学習するネット型の学習へと転移する可能性がある。

このような競争目的をもつドッジボールの楽し

さについて、後藤らは、「ドッジボールが子どもに人気のある理由は、動く獲物を追い込んでボールを投げ当てること、また逆に、これをひらりとかわすことにあるといえ、ドッジボールの『動く的当てゲーム』としての運動課題に妙味を感じるからである」(3－173頁)と述べる。すなわち、ドッジボールは、ボールを相手の身体に当てる、そのボールを捕る、かわすことが楽しいゲームといえる。

このように高い教材価値をもつドッジホールではあるが、深見によれば米国では評価が大きく分かれているという。深見は、米国の教育雑誌に掲載された3編のドッジボールに関する論文をもとに、米国におけるドッジボールの教材価値とその課題を紹介している(1－62頁～64頁)。以下、その内容を要約する。

米国においても、ドッジボールは、子どもにも教師にも非常に人気が高い。しかも、ドッジボールは、ボール操作能力はもちろん、生まれながらにして備わっている攻撃性や支配性を上手に統制する能力や、ときにはチームのために身体を張ってみんなの犠牲になるといった理想的な生き方を教えてくれる価値があるという。

一方で、ドッジボールは、別名「殺人ボール」「人殺しゲーム」「監獄ボール」等と呼ばれ、人を標的にしてボールをぶつけるという非教育的側面や、それにより精神的にも肉体的にも子どもを傷つける可能性があるという。また、教えるべき内容があまりなく、最も運動技術や体力を育成すべき対象である運動の苦手な子どもたちのゲーム参加の機会を奪ってしまうともいう。

このように、ドッジボールには様々な教材としての高い価値を含んではいるが、解決しなければならない課題があることがわかる。

(3)　ボールを捕ることが苦手な子どもとドッジボール

前述した通り、相手の身体をねらってボールを当てることが、攻撃時の競争目的である。そのため、相手が投じるボールは、体幹にパスされるようなボールばかりではない。捕球の失敗を意図して、スピードのあるしかも捕球しづらい下半身などの身体を的にしてボールは飛んでくる。このようなボールが飛び交うドッジボールであるからこそ、ボールを捕ることが苦手な子どものゲーム参加が消極的になるのである。

しかも、ボールを捕ることが苦手な子どもは、ボールがこわい、捕球できる気がしないと思い、捕球しようとしても失敗を繰り返すことに終始するだけで、捕る動きの感じや身体の動かし方を獲得することができない。そして、このような経験によって、ドッジボールは感情的に嫌い、なじめないという負の感情をもたせ、捕球を避ける逃避行動につながるのであろう。

このような子どもたちには、目の前に示された運動に対して感情的にいやではないという「なじみの地平」(9－159頁)に誘い込むような教材が必要になる。また、金子によれば、ある動きができる、あるいは動けるためには、「身体をどのように動かせばうまくいくのかという〈私の動きかた〉に身体中心化として収斂していくコツという身体知」(8－326頁)と、「私の身体を取り巻く情況の有意味さをとらえ、同時にその動感志向を投射できる〈私の動きかた〉を生み出すカンという身体知」(8－326頁)の2つの動感能力が必要になるという。

このことをボールを捕ることが苦手な子どもについて考えてみると、「飛んでくるボールの動きに合わせて、いつ、どこに移動したらよいのか」といった、ボールが飛んでくる方向やスピードなどのボールの動きを読むカンと、「どのような感じで、ボールを捕ればよいのか」といった、捕る動きの感じや、身体の動かし方といったコツが絡み合わず、捕ることがうまくできない子どもであったといえよう。

このように考えると、「動く的当てゲーム」であるドッジボールにおいて、ボールを捕ることが苦手な子どものゲーム参加は、困難を極めることがわかる。

3.　ドッジボールの教材づくり

(1)　既存のドッジボール教材の検討

ドッジボールは、地域や学校ごとに様々なルールが採用されているが、相手コートへの侵入を禁止するルールや、ボールを当てられたら相手

チームの得点となることは一貫している。

このような様々にあるドッジボールのゲームを後藤らは、コート条件とプレイヤーと攻防の形式よって「中当て型」と「対面型」の２つに大別している。「中当て型」は、一定時間攻守（内野と外野）の役割が固定され、時間が経過すると攻守を交代する。一方、「対面型」は、攻守の役割はボールを保持したチームが攻撃であり、そうでないチームは守りとなる[(3－176頁)]。

さらに、投捕、避ける技能が未熟な段階では、これらの動作の基本的な動きを別々の課題として学習する方が身につけられやすいことから、「対面型」よりも「中当て型」の方が相応し、「中当て型」から「対面型」へと段階的に指導することによって質の高い動きが身につくと指摘している[(3－178頁)]。

このことから、ボールを捕ることが苦手な子どもにとっては、「中当て型」のゲーム形式が適切であることがうかがえる。低学年を対象とした「中当て型」の代表的な教材として「ころがしドッジボール」と「はしごドッジ」がある。この教材について、ボールを捕ることが苦手な子どもの学びの視点から以下に検討する。

ア．ころがしドッジボール（図１）

ころがしドッジボールは、円形のコートの外に外野は位置し、コートの中に位置する内野の身体を的にボールを転がす。内野は、身体にそのボールが当たらないように避ける。決められた時間が経過したら、内野と外野は交代して、どちらが多く当てたかを競うゲームである。

この教材には、ボールを捕る課題がない。そのため、飛んでくるボールへの恐怖心が軽減でき、捕球が苦手な子どもも参加しやすい。また、飛んでくるボールは、空中ではなく平面を転がるため、ボールの軌道を読んで動くことがやさしくできる。さらには、転ってくるボールに当たらないように、身をかわす動きを身につけることができる。

しかしながら、ボールを捕ることが苦手な子どもは、前述したように捕る動きばかりではなく、飛んでくるボールの軌道を読んで動くことが難しい。そのため、転がってくるボールを避けることがうまくできないため繰り返しボールに当たり、チームを負けに導くお荷物となりかねない。また、本教材は、ボールの動きの先読みはするものの、ボールから遠ざかる動きとなり、ボールに近づいて捕球するその動きとは逆の動きとなる。

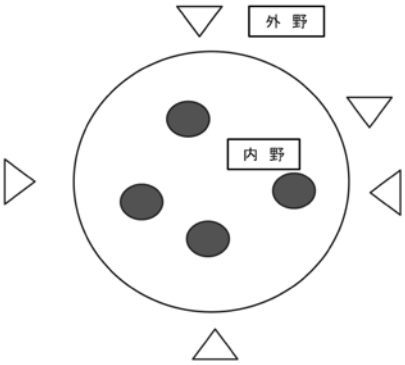


図１　ころがしドッジボール

イ．はしごドッジ（図２）

はしごドッジは、方形のコートの外に外野２人が位置し、コートの中に位置する２人の内野の身体を的にボールを投げる。内野は、そのボールを捕球したり、避けたりする。決められた時間が経過したら、内野と外野は交代して、どちらが多く当てたかを競う。そして、勝ったチームは、右側のコートに一つ移動（はしごを一段上る）し、対戦チームを替えて再びゲームをする。

このゲームは、内外野ともプレイヤーの数を２人にして、投げたり、捕ったりする機会を多く保障しながら、技能向上を図ることができる。しかしながら、高橋が「ボールを捕る技能が身についていない段階では、コート内のチームは避けることだけを課題にすべきである」[(14－92頁)]と述べるように、ボールを捕ることが苦手な子どもにとっ

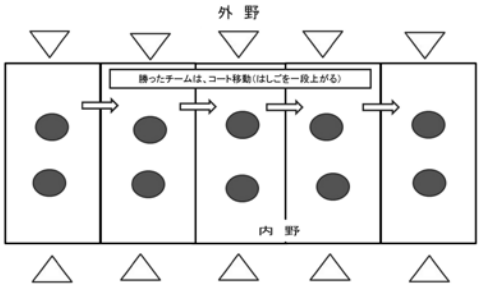


図２　はしごドッジ

ては、難しいゲームといえる。

⑵　ドッジボールの教材配列

ボールを捕ることが苦手な子どもにとっては、上記で述べた「ころがしドッジボール」も「はしごドッジ」も難しい教材である。このように考えると､ボールを捕ることが苦手な子どもには､ボール捕球がもっとやさしくでき、しかもゲームを繰り返しながら捕球技能が高められるような教材が必要である。

このような考え方に基づいて考案した教材を配列したのが、表１の教材配列である(注)。この教材配列は、ボールの動きを読んで動く課題から、動きをやさしくしたボールを捕る課題へと高めて、最終的にはボールを捕ったり投げたりしながら「はしごドッジ」が楽しめるようにすることを想定している。

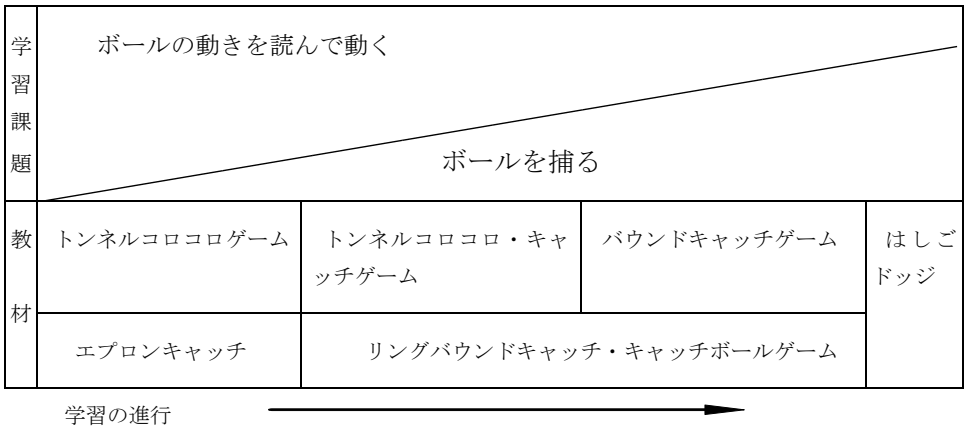
⑴トンネルコロコロゲーム(12－54頁)（図３）

このゲームは、ボールの動きを読んで移動する経験をさせることを意図している。「中当型」を取り入れ、外野はもう１人の外野にボールを転がしてパスする。内野は、このボールを開脚立ちした両脚の間を通過させることで１点が獲得できる。飛んでくるボールは、平面を転がってくるため、空中を飛んでくるボールよりも、ボールの軌道の先読みがやさしくできる。しかも、捕球をすることが課題となっていないので、捕れそうにないから動けないことを防ぐことができる。

⑵トンネルコロコロ･キャッチゲーム(13－78頁～79頁)（図４）

このゲームは、前述したトンネルコロコロゲームの意図を踏襲しながら、ゴム紐をはさんで平面を転がってくるボールを捕る課題を加えて、攻防

表１　教材配列



１．ゲームの人数　２対２（人）

２．コート　縦5m，横3m

３．ルール

ア　外野は，内野ライン上に張られた高さ40ｃｍのゴム紐の下をボールを転がして，もう１人の外野にパスする。

イ　内野は，転がってきたボールが自分の両脚の間を通過するように移動して，左右に脚を開いて立つ。

ウ　外野は，内野の両脚の間を通過させずに向かい側の外野にパスできたら１点。内野は，自分の両脚の間にボールを通過させたら１点とする。

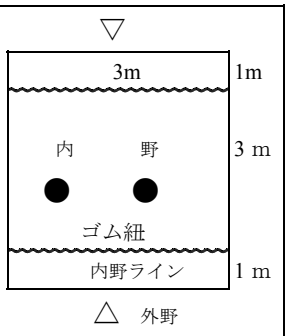
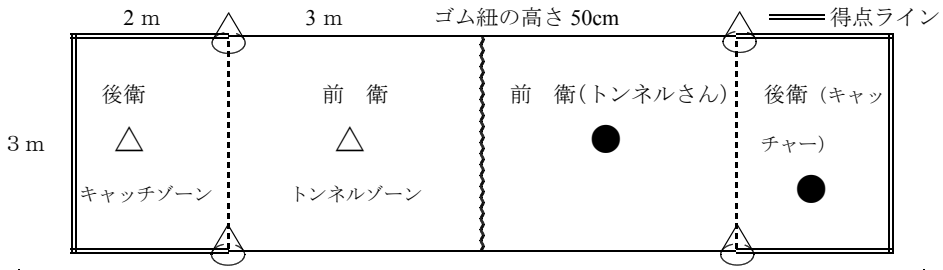


図３　トンネルコロコロゲーム



１．ゲームの人数：　2対2（人）

２．コート：　ゴム紐を中央にして，縦5m，横3m（バドミントンコートの縦半分）

３．用　具：　ボール：ミニソフトバレーボール　ゴム紐の高さ：50㎝程度

４．ルール

ア　前衛（トンネルさん）は、トンネルゾーン内、後衛（キャッチャー）は、キャッチゾーン内だけでしかプレイできない。

イ　攻める時には、後衛がキャッチゾーンからネット下を通過させて、相手コートにボールを転がす。そのボールが、得点ラインを通過したら１点。投げ終わったら、後衛は前衛と交替する。

ウ　守る時には、前衛と後衛は次の行動を行う。

・前衛・・・相手コートから転がってきたボールが自分の両脚の間を通過するように移動して、左右に脚を開いて立つ。通過させたら１点とする。

・後衛・・・転がってきたボールを捕球する。触球数に関係なく、ボールを保持すれば捕球とみなして１点とする。

エ　４分終了時に得点の多い方の勝ち。

図４　トンネルコロコロ・キャッチゲーム

を楽しむゲーム形式に修正している。

１チームは２名で構成し、前衛と後衛に分かれ、その役割は下記の通りである。

・攻撃時は、後衛がコート中央に張られたゴム紐の下を転がして、相手コートの得点ラインを通過させると１点

・守備時は、前衛が、トンネルコロコロゲームと同様に、両脚の間を通過させると１点。後衛の児童は、コート内で捕球したら１点

(3)エプロンキャッチ (12－55頁)（写真１）

本間らによると、「小学生のドッジボールの公式試合における投・捕球動作パターンを調べた結果、捕球動作で最も多かったのは、胸と両方の掌と胸で抱きかかえるような捕り方『屈曲胸捕球』であり、成功率も高い」(5－684頁) と報告している。

このことから、「屈曲胸捕球」は、強く投げられたボールの捕球失敗を防いだり、弾力的に怪我なく捕球する上で適切な捕球動作といえる。そのため、ボールを捕ることが苦手な子どもには、まずは身につけさせたい捕り方である。

この屈曲胸捕球の動きを身につけることを意図

（写真１）

した教材が、エプロンキャッチである。ビニールシートを張って斜面をつくり、この斜面を転がり落ちるボールを身につけたエプロンで捕る。ボールは平面を転がるので、空中を飛んでくるボールよりも、先読みがしやすくなる。

まずエプロンを着けさせ、その裾を内側から両手ですくい上げ逆手で握らせる。そして、シートから転がり落ちるボールを両手でもったエプロンを広げようと両腕を差し出し、さらにエプロンで包み込むようにボールを捕らせる。

このようにして、「屈曲胸捕球」の動きの類似の運動経験を経て、「エプロンをつかわないで捕る」「ボールが転がり落ちるシート端から離れた地点から移動して、エプロンをつかわないで捕る」ことを新たな課題とする。

(4)キャッチゲーム (13－78頁～79頁)（図５）

このゲームは、前述した「トンネルコロコロ・キャッチゲーム」の意図やゲーム形式を踏襲しながら、空中を飛んでくるボールへの対応を課題としている。

特徴的な修正点は、下記の通りである。

攻撃時：自分のコートでワンバウンドさせて相手コートに投げ入れる。

守備時：投げ入れられたボールをノーバウンドで捕球すると1点。

相手チームから投げられるボールは、山なりに緩やかに落ちるため、ボールの動きを読んで移動することがやさしくなる。また、エプロンキャッチで身につけた屈曲胸捕球の動きで対応できる。

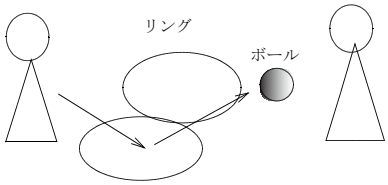
さらに、捕ることができるようになったら、「ワンバウンドさせて相手コートに投げ入れる」から、「ワンバウンドさせないで、投げ入れる」のルールに変更して、空中を直線的に飛んでくるボールの捕球を課題とする。

(5)リングバウンド･キャッチゲーム (13－80頁)（図６）

この教材は、空中を飛んでくるボールを捕ることを課題とした教材である。床に置いたリングを真ん中にして､ペアの子どもが向かい合って立つ。１人の子どもが､リングの中にボールを投げ当て、バウンドさせてもう１人の子どもにパスする。パスされた子どもは、そのボールを捕り、リングの中にボールを投げ当て、ペアの子どもにボールを返すことを繰り返す。

ペアからパスされたボールは、バウンドして山なりに緩やかに飛んでくるので、捕球しやすい。また、リングの中に投げ当てることが条件となるので、ある程度一定の軌道をもつボールを捕り手に送ることができる。

そして、リングを１個から２個に増やし、左右に並べて床に置く。相手にパスする時には、２個のリングから１個を選んで、前述したようにパスを繰り返す。そうすることで、１個のリングの時よりも、左右に移動する動きを引き出すことがで



※どちらかのリングの中にボールを投げ当て、相手にパスします。

図６　リングバウンド・キャッチ

「トンネルコロコロ・キャッチゲーム」からの変更点

〇攻める時には、コート中央に張られた高さ 80cm のゴム紐を越えるようにして、自分のコートでワンバウンドさせて、相手コートに投げ入れる。

・自コートであれば、どの位置からでも投げてよく、ボールを保持して移動してもよい。

・投げ入れたボールが、得点ラインを通過したら１点。ただし、相手コートに落下しないで、直接得点ラインを越えた場合は得点にならない。

〇守りの時には、ネット越しにくるボールを直接捕球すると１点。

・前衛、後衛にかかわらず、捕球者が返球する。

図５　キャッチゲーム

○２人が３m離れて向かい合う。
・相手のからだをめがけて投げるようにする。
・１分間でボールを落とさず捕球した回数を競う。
○グループで捕球した回数を競う。
・１チーム８人を２グループに分けて、向かい合う。
・右図のよう、投捕が終わったら入れ替わる。
・３分間で落とさず捕球した回数を競う。

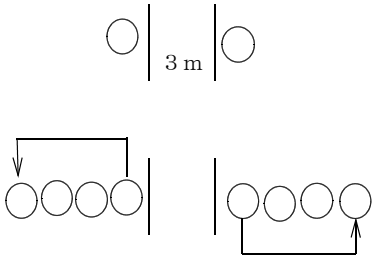


図７　キャッチボールゲーム

きる。

さらに、１分間のパス回数を競うゲームにすることで、捕ってから投げるまでの時間を短縮する必要が生じる。その必要性から、屈曲胸捕球から手だけで捕球する動きや捕ってすぐに投げる動きの発生を促す。

⑹キャッチボールゲーム（図７）

このゲームは、はしごドッジのなかで頻繁に生じる「ノーバウンド自分の身体を的に飛んでくるボールを捕る」ことを課題としたゲームである。３m離れてペアの子どもは向き合う。１人の子どもが、もう１人の子どもをめがけてボールを投げる。もう１人の子どもは、そのボールを捕って、投げ返すことを繰り返す。１分間のなかで捕球が成功した回数を競うゲームである。

5. まとめ

ドッジボールは､｢投げる｣｢捕る｣といったボール操作の技能習得ばかりでなく、バレーボールなどに発展する戦術を学ぶことができるなど、様々な学習内容が包含されたすぐれた教材であるといえる。しかし､｢動く的当てゲーム｣の特性をもつボールゲームであるがゆえに、ボールを捕ることが苦手な子どもにとっては、こわく、実質的なゲーム参加を困難にする。

このようなことから、本稿ではボールを捕ることが苦手な子どもが、実質的に参加できるような教材づくりの必要性を述べながら、その教材例を提示した。ここで紹介した教材は、ドッジボールの競争目的である「相手に捕球されないように投げ当てる」｢当てられないように逃げたり、捕球したりする｣のいずれかが含まれたゲームである。その意味では、ドッジボールを素材としながら、ボールを捕ることが苦手な子どもの実態を考慮して、ボールの動きや捕ることをやさしくした教材であるといえる。

さて、ドッジボールは、子どもになじみがあり人気のボールゲームである。それ故に、ボールを投げる、捕るといったボール操作の優劣にかかわらず、ドッジボールが楽しめるような教材づくりは重要である。

今後は、本稿で提示した教材配列に基づいた実践を通して、さらにドッジボールの教材づくりとその教材配列の検討をすることが課題である。

注）本教材は､筆者が今までに発表した教材を、ドッジボールの下位教材として位置づけながら再構成したものである。

引用・参考文献

1）深見英一郎：米国におけるドッジボールの教材価値、体育科教育、(56) 10、大修館書店、62頁－65頁、2008.
2）福原祐三・鈴木理：みんなが主役になれるバレーボールの授業づくり、大修館書店、2005.
3）後藤幸弘・池田康明：ゲーム形式の発展展開によるドッジボール学習についての基礎研究 － ドッジボールの教材価値とゲーム様式の分類から－、兵庫教育大学研究紀要（27)、173頁－182頁、2005.
4）廣瀬勝弘・村上成治・栗原武志、森浩文；学校体育におけるドッジボールの教科内容に関

する一考察、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、81頁－86頁、2010.
5）本間正行･五日市恭子･浦田燁子･志沢千鶴子･竹内正雄・西山逸成・新井重信：小学生のドッジボール競技における投・捕球の基礎的研究、日本体育学会大会号（22）、684頁、1971.
6）伊藤久仁：今こそ学びの順序を考慮した教材作りへ 、体育科教育、（55）5、大修館書店、18頁－21頁、2007.
7）岩田靖：体育の教材を創る、大修館書店、2012.
8）金子明友：身体知の形成（上），明和出版，2005.
9）金子明友：身体知の形成（下），明和出版，2005.
10）小久保桂一郎・柴崎正行：日本の幼児教育におけるドッジボールの変遷、日本保育学会発表論文集（57）、48頁－49頁、2004.
11）日本ドッジボール協会：http://www.dodgeball.or.jp/jdba/history.html
12）宮内 孝・三輪佳見：ボールを捕ることが苦手な小学校低学年児童の促発指導、スポーツ運動学研究（24）、49頁－63頁、2011.
13）宮内 孝：小学校低学年児童を対象とした「教材づくり」－ボールを捕る動きを高める視点から－南九州大学人間発達研究(4)、76頁－85頁、2014.
14）高橋健夫：新しい体育の授業研究、大修館書店、1989.
15）歌川好夫：すべでの子どもに確かな技能と体育の学力を保障する試み－ドッジボール再評価－，体育科教育（56）1，大修館書店，52頁－55頁，2008.
16）内村美帆・金高宏文：低学年における投能力向上に関するトレーニング研究－子どもが生き生きとドッジボールに参加する姿をめざして－スポーツトレーニング科学(6)、679頁－86頁、2005.

＜付記＞：本研究は、科学研究費補助金（基盤研究Ｃ 課題番号24531223）を受けて実施した。

Summary：Dodgeball is popular not only in P.E. classes but also in free time or extra-curricular classes. However, it is difficult for the students who cannot catch a ball to join the game and they tend to have negative feelings about dodgeball.
Moreover, dodgeball is learned by children in lower grades of elementary schools as a basic ball game. If they have negative feelings about dodgeball at this time, they may feel averse to other ball games after that. Also, they may even come to dislike P.E. itself, so it is quite important to solve this problem.
Therefore, here we redefine the worth of dodgeball as an educational material from the viewpoint of children who are not good at catching balls. Also, by showing an array of materials which solve those problems, I am going to offer fundamental information to make educational materials for dodgeball.